北の大地の「鹿ノ子百合」
―啄木と千恵子のケース―

北　嶋　藤　郷

はじめに

短命薄倖の天才・石川啄木は、明治19年（1886）2月20日に岩手県南岩手郡日戸（ひのと）村に生まれた。父親一禎（いつてい）は、この村の曹洞宗常光寺の住職。母親カツは、一禎の師僧葛原対月（かつらはらたいげつ）の妹である。啄木が生まれた翌年、一禎は渋民村（しぶたみむら）宝徳寺の住職となり、一家はこの村に移った。啄木の才能と悲劇的な死は、英国詩人のJohn Keatsを、また米国詩人のEdger Allan Poeをも想起させる。下掲歌は、啄木望郷歌中の最高傑作ともいえる一首である。

かにかくに渋民村は恋しかり / おもひでの山 / おもひでの川

この夫婦には4人の子供がいたが、男の子は啄木だけであったので、両親は彼を溺愛した。対月は学僧として誉れ高い人物であり、啄木も気高く育てられた。小さな国の小さな王様のような存在であった。岩手郡渋民尋常小学校を首席で卒業して、村人から神童（しんどう）と評された。爾来、啄木は文学を愛し、赤貧洗うが如しの貧窮生活に命を削ぎ落し、わずか26歳（1912）余で絶命。故郷を想う自分の心を〈思郷〉と表現した啄木は、故郷を離れて苦難の運命を辿り、まさに疾風怒濤（Sturm und Drang）のあまりにも短い人生であった。ドナルド・キーンは、「日本近代文学を通読すると、私は啄木が最初の現代人であったというような気がしてならない。」（『日本文学を読む』1977、p.85）あるいは「現代性の本質」を伝える文学者であった、と論述している。啄木の歌は、実生活に根ざした三行分かち書きという新形式とも相まって、浪漫主義が支配していた当時の短歌界に大きな影響を与えた。北の大地漂白時代の追想歌や、大都会生活の哀歓をうたった生活詠は、人間生活の具体に即してうたったもので、一読して忘れ難い。

啄木の処女歌集『一握の砂』は、明治43年（1910）に東雲堂（とううんどう）書店から発行されたが、この歌集には、啄木はさまざまな創意工夫を凝らした。全歌を3行書きにして、読者に一行ごとに小休止を置いて読むことを要求した。とりわけ1ページに2首、見開きで4首読ませるという仕掛けをした。啄木は天才歌人であるとともに詩人であった。彼の3行分ち書きの短歌は、美しい3行詩でもある。特に、啄木短歌の鑑賞には〝朗読〟を薦めたい。

本稿の眼目としては、『一握の砂』の「忘れがたき人人（二）」に焦点を

絞って、啄木が純情清冽な交わりをむすんでいた、函館の公立弥生尋常高等小学校訓導であった女教師橘智恵子に寄せる相聞歌 22 首を、諸家の英訳も交えて鑑賞して見たいと考えた。啄木は歌の機能を上手に利用したが、「しきしまの」とか「たらちねの」のような歌詞（うたことば）とは縁がなかった。そのためであろうか、啄木の歌は翻訳に向いているのである。啄木の歌はクリアカットで、その意味は明晰である。完璧に磨かれたダイヤモンドのように透明であるが、魅力はそれだけではなく、多義的で暗示的でもある。この矛盾しているかのような、〈具体的〉で〈黙示的〉な 2 つの特徴を同時に表現できなければ、翻訳は成功とはいえないであろう。英語訳に関しては、筆者の知る限りでは、啄木は数名の名高い翻訳者を得た。

北の大地へ　函館滞在は、明治 40 年 5 月 5 日～ 132 日間、『函館日日新聞』

啄木が北の大地・北海道に向かうため、津軽海峡を連絡船陸奥丸に乗り、荒れ狂う怒号の海へ船出し、函館に到着したのは、明治 40 年（1907）5 月 5 日のことであった。

船に酔ひてやさしくなれる / いもうとの眼見ゆ / 津軽の海を思へば

前日、「日本一の代用教員になって死にたい」と念願した啄木は、月俸 8 円の渋民村小学校に決別して、妹の光子を帯同して、渋民村を追われるように、悄然として去った。この時、啄木 22 歳。次掲歌は、この時の消息を伝えている。

石をもて追はるるごとく / ふるさとを出（い）でしかなしみ / 消ゆる時なし

函館の文学グループ「苜蓿社（もくしゅくしゃ）」の同人諸氏は、啄木を喜んで迎えた。同人には、大島流人、新潟県新発田出身の宮崎郁雨、岩崎白鯨、吉野白村、並木翡翠、松岡蕗堂などがいた。これら同人諸氏と啄木が明治 40 年 6 月に撮影した写真が残っている。（宮崎郁雨『函館の砂―啄木の歌と私と―』参照）かくて啄木は、青柳町の下宿先に落ち着いて、宮崎郁雨等と同人雑誌『紅苜蓿（べにまごやし）』を主宰することになった。郁雨は、啄木が「「苜蓿社」に来たことは、「孔雀（くじゃく）が鶏舎へ舞い込む位に私達を狂気させた」（平凡社『別冊太陽』195: 2012.4. p.128）と記している。

函館の青柳町こそかなしけれ / 友の恋歌 / 矢ぐるまの花

函館時代の啄木は、同人誌を発行するなど、文学的には充実していたものの、生活面では相変わらず不安定で、函館商工会議所の臨時雇い、函館区立弥生尋常高等小学校の代用教員、『函館日日新聞』の遊軍記者・校正係などの非正規職員の仕事を転々とした。盛岡中学中退という、中途半端な学歴ゆえにそうなったのだが、人一倍自尊心の強い啄木は、そうした待

遇に満足せず、一年足らずの間に 6 回も職業を変えた。吉野白村の手引きで、弥生尋常高等小学校の代用教員となるため、彼が喜んで就任したのは、6 月 12 日であった。月俸 12 円。校長は大竹敬三氏で、彼のルーツは新潟県長岡市にあるようだ。弥生小学校は、啄木の日記（「函館の夏」9.6 記）によれば、生徒数 1100 名を超え、教員数 15 名で、そのうち 8 名までが女教師によって占められていた。岩城之徳の『啄木歌集全歌評釈』によれば、啄木が女教師橘智恵子と初めて会ったのは、明治 40 年 6 月 11 日のことである。（p.224）

東海の小島の磯の白砂(しらすな)に / われ泣きぬれて / 蟹とたはむる

啄木の短歌で最も人口に膾炙されたこの名高い歌は、挫折して、行方も知らず流浪する自己の運命に涙したのである。感傷的で通俗的かといえば、そうではない、と筆者は考えている。歌の場面は函館の大森浜とされている。知る人ぞ知る事実であるが、この歌には先行する象徴詩的詩風の「**蟹に**」という詩がある。優れた啄木の日本人翻訳者の坂西志保は、『詩集一握の砂』で、I play with crabs. と複数形をとり、「**蟹に**」（T0 A CRAB）と単数形をとる。歌集『悲しき玩具』（*MY SAD TOYS*）は、MY をつけてあるのがユニークである。翻訳の場合は、単複問題と性の区分（gender）は常に注意を払うべき問題である。筆者は、上記の歌は、I play with a crab. と単数形としたい。それのほうがより孤独感が滲み出てくる気がする。では前掲歌で、「**友の恋歌**」の友は単数であるとする啄木研究家が少なくないが、筆者は断然複数形をとりたい。C. シーザー訳は、my friends' love poems と複数形をとっている。少し啄木から外れるが芭蕉の「古池や蛙(かわず)とびこむ水の音」は、日本人ならほとんどの人が蛙は一匹と考えるであろう。手許に佐藤紘彰『100 匹の蛙』（*One Hundred Frogs*, 1983）という袖珍本があるが、100 名の英訳者の内 98 名までが単数形をとっている。そのほうが却って古池の静寂さが増してくるように感じられるからであろう。池田功『石川啄木入門』では、「静動中の動は静であるという法則」と説明されている。（p.97）翻訳時に出会う問題点は、①単複問題②性別③背景などの不明などがあるが、特に単数複数問題は、西欧語では厳格に峻別されるが、日本語では曖昧でおおらかである。

啄木日記で、函館の弥生小学校の教師たちを揶揄的に評している中の、女教師に関する部分を引用する。22 歳の啄木が思慕の情を捧げた若き日の橘千恵子が登場する。

女教師連も亦面白し。遠山いし君は背高き奥様にて煙草をのみ、日

向操君は三十近くしての独身者、悲しくも色青く痩せたり。女子大学卒業したりといふ疋田君は豚の如く肥り熊の如き目を有し、一番快活にして一番「女学生」といふ馬鹿臭い経験に慣れたり。森山けん君は黒ン坊にして、渡部きくゑ君は肉体の一塊なり。世の中にこれ程厭な女は滅多にあらざるべし。高橋すゑ君は春愁の女にして、橘智恵君は真直に立てる鹿ノ子百合なるべし。（「全集」vol.5. 明 40.9.4 付日記）

啄木が弥生尋常高等小学校で邂逅したのは、同僚の橘智恵子という女教師で、8 名の女教師の中で、ひときわ彼の目を引いた。18 歳の清楚な乙女であった。彼は後にその印象を『ローマ字日記』にこのように綴っている。「智恵子さん！ なんといい名前だろう！ あのしとやかな、そして軽やかな、いかにも若い女らしい歩きぶり！さわやかな声！ 二人の話をしたのはたった二度だ。一度は大竹校長の家で、予が解職願いを持っていった時、一度は谷地頭（やちがしら）の、あのエビ色の窓かけのかかった窓のある部屋で―そうだ、予が『あこがれ』を持っていった時だ。どちらも函館でのことだ。」（「全集」vol.6. 明 42.4.9 付日記）

啄木の短歌の特徴のひとつは、〝絵画性〟にあると思うが、ある歌は風景画のようでもあり、人物画のようでもある。橘千恵子をうたった下記の歌はまるで蕗谷虹児の美人画を眺めているようである。「職場で芽生えた恋」ともいえようが、啄木が千恵子に見ていたものを、彼の短歌、日記、書簡などから抽出すれば、爽やかさ、明るさ、しとやかさ、あるいは清楚・純潔・知性・気品・自立心などの項目を挙げられる。

人がいふ
鬢（びん）のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし

「鬢」とは、耳の前の髪の毛。したがって「鬢のほつれ」とは、結った髪の鬢のあたりが少し解けて耳のあたりに垂れさがっている様子をいう。そこにはえもいわれぬ色気を漂わせている場合があることを啄木は知っていて、千恵子のそれに目を止めて、心の中で讃嘆したのである。（近藤典彦『啄木短歌に時代を読む』参照）この歌の英語圏の翻訳は皆無である。「鬢のほつれのめでたさ」を芯から理解できる外国人は少ないからであろう。

「君」とは、もちろん啄木の同僚の女教師の千恵子を追想している。彼は同じ職場に 4 ケ月もいれば、恋愛の対象をそこに見出してしまうのであるが、詩人は、ひと時の人生の苦を忘れようとしているのであろうか。初出「東京毎日新聞」（明 43.5.8）。

世の中の明るさのみを吸ふごとき	**they seem to drain**
黒き瞳(ひとみ)の	**all the light**
今も目にあり	**from this world**
	even now I see
	your dark-lit eyes　—（CS）

この歌は、清楚な人柄と明るくいきいきした性質がうかがわれる代表作である。キーンも「自分の翻訳よりいい」と絶賛するシーザー訳を掲げてみた。註には諸氏の翻訳を掲げてあるが、わけても坂西志保の “Dark Pupils” は、特筆に値する。

初出「東京毎日新聞」（明 43.5.8）。「びんのほつれ」5 首の中の 1 首。）

橘千恵子抄

橘智恵子（戸籍はチエ）は、明治 22 年（1889）6 月 15 日、北海道札幌郡札幌村 14 番地の旧家で、農園業を営む父仁(じん)と母鎰(いつ)の長女として生まれた。父仁は、旧幕臣の農学者・津田仙の経営する学農社（農学校）の僕として入った。津田仙にちょっと触れておくと、津田は黒船の浦賀来港後、英語の勉強を志し、慶応 3 年（1867）幕府の勘定吟味役の随員として、福沢諭吉らと共に渡米した。帰国後、農業の近代化と人材の育成を志して労働者農学校を設立した。

津田仙の次女の梅子は、北海道開拓使派遣の女子留学生として、横浜を発った日本女子教育の先駆的な働きをした女性。明治 4 年（1871）、欧米視察団の岩倉具視大使一行がアメリカへ旅立つ船上の梅子は、開拓使が募集した女子留学生のうち最年少の少女で、7 歳～ 17 歳までアメリカで 11 年教育を受けて帰国、さらに24歳から2度目のアメリカ留学で、ブリンマーカレッジで生物学を学んだ後、日本女性のための女子英学塾、のちに津田塾大学を創設した。

橘仁は、助手時代に仙の紹介で矢野鎰と知り合い、津田仙夫妻の媒酌で、明治 15 年に結婚。鎰は豊島師範の古い出身で、札幌独立基督教会に入会した敬虔なクリスチャンであり、米国の宣教師サラ・C・スミス女子の創設した北星女学校（現在の北星学園女子短期大学）に教鞭を執ったことのある賢母型の女性で、夫の仕事を物質的にも援助した。この気鋭の農業経営者と相思相愛の妻との間には、儀一、礼次、チエ、忠男、信、孝、悌という 7 名の子宝に恵まれた。江戸後期の小説家滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』（1814 ～ 1842）を想起する向きもあるであろう。伏姫が役行者から貰ったという 8 個の水晶玉の数珠、〈仁〉〈義〉〈礼〉〈智〉〈忠〉〈信〉〈孝〉〈悌〉

と橘家一家で役者が揃うわけである。子供たちもみな厳しい躾のもとに育てられた。千恵子は旧家のただ一人の令嬢として大切に養育された。

智恵子は、明治22年生まれの丑年。彼女は、札幌郡公立藤古(ふしこ)尋常小学校、札幌女子高等小学校を経て、北海道庁立札幌高等女学校を明治38年に卒業。同校本科を卒業後、引続き補修科に学び、翌年3月に修了すると同時に、道庁の指示で一ヵ年の予定で函館に配属され、弥生尋常高等小学校の訓導として赴任した。石川啄木が代用教員として弥生尋常高等小学校に赴任したのは、明治40年6月に入ってからのことである。しかも啄木は7月中旬から怠業欠勤するようになるから、啄木と千恵子が同僚として交際したのはほんのわずかの期間であった。啄木22歳、千恵子18歳の若さであった。啄木の処女歌集『一握の砂』の中で、「忘れがたき人人 二」22首は、どれも名歌秀歌といわれるが、すべて千恵子を歌ったものである。何故22首なのか？それは、彼女が明治22年生まれであること、啄木の作歌当時、千恵子が22歳であったこと、はたまた、啄木が千恵子の教鞭を執る小学校の同僚として知りあった時点において、彼自身が22歳であったことなども無関係ではないであろう。

当時、教員は訓導・準訓導・代用教員というふうに分かれており、訓導と代用教員では、歴然たる身分差があった。啄木が何となく、心引かれるその女教師は、4年生の担任の橘先生であることがわかった。同僚のうわさでは、札幌の郊外で大きな林檎園を経営している人の一人娘だということだった。川並秀雄『啄木秘話』には、「橘先生は、生徒を心から愛し、魂をうち込んで生徒に教えていた。慈愛のあふれるやさしい先生であった。」（p.20）と書いてある。すでに引用したように、啄木は8名の女性教員の容貌を「豚の如く肥り熊の如き目を有し」、「肉体の一塊なり」などと容赦なく揶揄的に書いているが、ひとり橘智恵子だけは「真直ぐに立てる鹿の子百合なるべし」と表している。これが啄木の文章中に現れる最初の橘千恵子である。盛岡中学校時代の回覧雑誌「爾伎多麻(にぎたま)」（第一号）に啄木は「嗜好」と題して、好きなものを列挙して、色、うす紫、花、百合の花、としているが、「うす紫」や「百合」は当時の流行で、明星派の好みでもあった。

また、改造社版『石川啄木全集』第4巻（1929）の「評論感想集」の中の項目「一握の砂」には、「けだかき百合の花は下見てぞ咲く。然れども人々よ、かく思へかし、人の目にふれぬ高野の百合にだにも、其生い立つや、莖は皆天を指す也。」と書き、数ページ後には、英国の詩人・キーツの詩句、“A thing of beauty is a joy forever.” の引用もある。

美人の姿を形容することばに、「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」があるが、啄木は智恵子を美しいイメージで捉えている。そこに啄木の彼女への好意を読み取ることができる。この学校で、彼女は女性ではただ一人の〈訓導〉であったが、驕らず、啄木が形容したままの清楚な女性であった。

「落陽が赤々と、山の端にかかり、波が濤々とうち寄する頃、啄木は橘先生を誘って、大森浜を散歩しながら、ハイネの詩を語った。橘先生と啄木が語る時は、いつも啄木一人が話し手で、橘先生はただかすかにうなずくのみであった。」（『啄木秘話』p.22）と川並秀雄は書いているが、筆者は、啄木と智恵子が大森浜を散策などする機会は、一度もなかった、と思っている。理由は、それを示す第一等史料が全く見つからないからである。

ドナルド・キーンは、『石川啄木』で、「疑いもなく啄木は智恵子に恋をしたが、その純潔さは犯しがたいように見えた。日記には書かれていないが二人で大森浜を散歩したという説があり、もし事実であれば啄木には愛を打ち明ける絶好の機会だった。しかし、啄木はそれらしいことを言えないまま、瑣末なことばかりしゃべったようだった。一篇の短歌が、啄木の失敗を思い起させる。」（雑誌『新潮』2014.10 第五章、p.238、角地幸夫訳）と書き、次の短歌を挙げている。

頬（ほ）の寒き	**A man with cold cheeks,**
流離（りうり）の旅の人として	**On a journey in an uncertain place—**
路問ふほどのこと言ひしのみ	**All he asked was which road to take.** —（DK）

翻訳としては、まことに見事な訳業である。an uncertain place －というのは、函館の大森浜を暗示的に指しているのであろうか。岩城之徳の歌解は、「頬の寒さをかこつ旅人の流浪の途次、道を問う程度のことをいっただけであるが……。」となっている。啄木と智恵子との関係は、彼が人知れず彼女の面影を慕っただけのはかないものであった。が、この歌の切々たる哀調は、読む人の心に哀感を感じさせる。歌集『一握の砂』の中で、智恵子は啄木に 22 首の相聞を作らせた。それも全てが秀歌とされる。これらの作品群は、心情を主とした青春の抒情歌である。

さりげなく言ひし言葉は	**I talked**
さりげなく君も聴（き）きつらむ	**casually**
それだけのこと	**you listened**
	the same—
	that was all —（CS）

結句の「それだけのこと」（that was all）に収斂されている言葉が一首の中心ではあろうが、「さりげなく」が2度も繰り返されて、智恵子に思慕をよせるだけで終わった啄木のはかない思いが示されている。

函館の夏、そして大火

明治40年8月25日、夜10時半、東川町で出火、折柄の猛しき山背の風のため、暁に至るまでの6時間にして函館全市の3分の2を焼いた。啄木の勤める弥生小学校も新聞社も皆焼けた。市中49ケ町の内33ケ町、焼失戸数1万5千に上った。啄木の弥生小学校の仕事も、8月18日より入った『函館日日新聞社』の編輯局の遊軍記者の仕事もすべて烏有に帰した。

> 狂へる雲、狂へる風、狂へる火、狂へる人、狂へる巡査……狂へる雲の上には、狂へる神が狂へる下界の物音に浮き立ちて狂へる舞踏をやなしにけむ、大火の夜の光景は余りに我が頭に明らかにして、予は遂に何の語を以て之を記すべきかを知らず、火は大洪水の如く街々を流れ、火の子は夕立の雨の如く、幾億万の赤き糸を束ねたる如く降れりき、全市は火なりき、否狂える一つの物音なりき、高きより之を見たる時、予は手を打ちて快哉を叫べりき、予の見たるは幾万人の家をやく残忍の火にあらずして、悲壮極まる革命の旗を翻し、長き一里の火の壁の上より函館を掩へる真黒の手なりき、かの夜、予は実に愉快なりき、愉快といふも言葉当たらず、予は凡てを忘れてかの偉大なる火の前に叩頭せむとしたり、……（「全集」vol. 5, 8.27付日記）

この日の日記に啄木は、「予は乃ち盆踊りを踊れり、渋民の盆踊りを踊れり」という言及もある。この長い記述は、最も精彩に富む啄木の文章のひとつとなっているが、「予は手を打ちて快哉を叫べりき」とか、失われた生命に対して啄木の無神経な表現に、読者はいささか戸惑うかもしれない。

8月30日より、弥生小学校の仮事務所は大竹校長宅に置かれ、啄木はそこに出務した。学校では学籍簿を焼き、出席簿を焼き、ゆえにまず第一にやるべきことは、生徒名簿を調整して、罹災の状況を調査することであった。9月1日の日記には、同月4日に生徒を公園に集めるために、告知の貼紙に出かけたことが記されている。啄木と同行したのは、森山けん、高橋すゑと小使の4名で、板塀や土蔵の壁に広告を貼って歩いた。同日の日記には、「さて予等はいと疲れたり。疲れたれども若き女は優しきものな

りき。これ大いなる秘密なり、若き女の優しきは。」と記してある。

9月12日付の日記には、「朝のうちに学校の方の予が責任ある仕事を済し、ひとり杖を曳いて、いひ難き名残を函館に惜しみぬ。橘女史を訪ふて相語る2時間余。」とある。啄木はお別れの記念に、自分の処女詩集『あこがれ』を贈ろうと思ったが、手許になかったので、同人松岡蕗堂へ送ったものを取り戻して、「わかれにのぞみて 橘女史に捧ぐ 40年9月12日」と扉にペン書きして、大きな印を押した。（余談にあるが、啄木の揮毫は実に流暢である。例えば渋民の盆踊りでもしているような見事な筆の走りで、明治末期の三筆といえば、筆者は會津八一、熊谷守一、そして石川啄木を推しておきたい。）橘先生の下宿を訪問して、いざ先生の前に座ると、清らかで気高いほど明徹な人柄の女性に向かっては、思っていたことは言いそびれてしまって、啄木はつきない惜別の思いと、心残りを胸に秘めて、とぼとぼと杖を曳いて帰った。「ひとり杖を曳く」というのは、脚を痛めたのではなく、洋風の杖（stick or staff）は、明治の若者のハイ-カラの心意気でもあっただろう。

筆者には、心に引っ掛かるとことがある。いくつかの研究書では、啄木が智恵子の下宿先を訪問した時には、もうすっかり日が暮れていて、電燈が耿々とついていた、とある。現実には、啄木が智恵子を訪ねたのは午後の早い時間であったのではないだろうか。智恵子の住んでいた谷地頭は、当時函館の高級住宅地で隣近所の目もうるさくて、いかに温厚篤実な智恵子であっても啄木の長居を許さなかったはずで、「相語（あいかたる）二時間余」は啄木一流の誇張表現であっただろう。弥生小学校で、啄木と智恵子は、事務的な会話はあったものの、個人的なつながりは全くなかった。二人が話したのはせいぜい「二十分余」という位であろうか。夜の訪問は疑わしいというのは、当日の9月12日の日記には、智恵子と別れた後で「午后高橋女子をとひ、一人大森浜に最後の散策を試みたり。」とある。9月1日に〝美しき秘密〟をもった高橋すゑを訪ねたのである。啄木研究家の長浜功は、「啄木にかかれば高橋との二人の散策も『一人』となるのである。」と書いている。「高橋すゑ君は春愁の女」と啄木は9月4日の日記を書いている。研究家の多くは、智恵子との相聞歌のみを取り上げ、高橋すゑの存在を重視してはいないが、高橋すゑは函館生活の中で、思った以上に啄木の心を捉えた女性であったかもしれない。下記の歌は、智恵子ではなく、春愁の女・高橋すゑを詠ったものである。

あはれかの / 眼鏡（めがね）の縁（ふち）をさびしげに光らせてゐし / 女（おんな）教師よ

「忘れがたき人人 二」の第4首目は、下記のような短歌がみられる。

かの時に言ひそびれたる	**Even now the vital words**
大切の言葉は今も	**I failed to say at the time**
胸にのこれど	**Linger in my breast.　　— (DK)**

啄木は智恵子の部屋を訪れた際、今日は思い切って、言ってみようと意気込んでいたことなど、言いそびれてしまって、とりとめもない会話に終始してしまった。帰るとき詩集『あこがれ』をお別れのしるしにと差しだした。その扉には、「わかれにのぞみて橘女史に捧ぐ　40年9月12日著者」という達筆な揮毫が認められている。智恵子は、ひややかに清(きよ)き大理石(めし)のように、「ありがとう存じます。どうかお身体を大切に……」と言って丁寧にお辞儀をした。啄木はのちに、智恵子に愛の言葉を打ち明けなかったことを後悔している。上記の歌は、片思いに終わった彼女に対する思慕を歌っている。「大切の言葉」(the vital words) とは、いうまでもなく愛の告白である。

啄木は夜おそく日記を開いて、次のように記入した。

「この函館に来て百二十有余日、知る人一人もなかりし我は、新しき友を多く得ぬ。我友は予と殆ど骨肉の如く、又或る友は、予を恋ひせんとす。而して今予はこの記念多き函館の地を去らむとするなり。別離といふ言い難き哀感は予が胸の底に泉の如く湧き、今迄さほど心とめざりし事物は俄かに新しき色彩を帯びて予を留めむとす。……」こうして函館の大火は啄木に札幌移住を誘い、北の大地の漂白は続いていく。滞在わずかに4ヶ月余、函館の大火はまさに無常の業火であった。啄木は函館大火で失職することになった。

翌日、星黒き焼跡の風に送られて、啄木は鞄一つを持って、札幌行の夜汽車の人となった。函館駅頭には「苜蓿社」の同人たちと、弥生小学校の同僚の数名が見送りに来ていた。その中に、橘智恵子先生がきちんと紫色の袴をつけて、控え目に参加していた。やがて汽車は暗闇に消えていったが、プラットホームでだれかが、白いハンカチーフを振るのが見えた。啄木が智恵子と最後に会ったのは、明治40年9月13日のことである。二人の間で会話を交わしたのはたった2回であった。彼女は啄木の同僚で18歳の乙女であった。そのような清らかな追想に浮かぶ清楚な乙女を、3年後に発刊された『一握の砂』の「忘れがたき人人 二」に回想歌として歌っているが、これらは絶唱の評価が高い。

函館(はこだて)のかの焼跡(やけあと)を去りし夜(よ)の	**The ruins of Hakodate City I left**
こころ残りを	**on the night soon after its great**
今も残しつ	**fire,**

yet I still have some regrets.

函館の街の灯火が徐々に見えなくなった時、「別離といふ云ひ難き哀感」が胸の底に泉の如く湧き、啄木は抑えようもなく涙を催した。函館には、120 日あまり滞在した。函館でも随一と評判の高い弥生尋常小学校の代用教員のほかにも『函館日日新聞』の遊軍記として雇われ、入社の日から週一回の「月曜文壇」の編集を担当、また「辻講釈」の評論を書き始めていた。

札幌の秋の空　札幌滞在：明治 40 年 9 月 13 日～9 月 26 日まで 14 日、『札幌北門新報』

石狩の都(みやこ)の外(そと)の
君が家(いへ)
林檎の花の散りてやあらむ

頭髪は丸刈り、甘いマスク、服装は色あせた羊羹色の紋付羽織、所持品は小さな鞄にステッキ。いかにも明治末期らしい流浪スタイルで身を固めている。この小柄は男は「都の外の君が家」を目指していた。目的の家が近づくにつれて、彼の歩行の速度は速くなり、一足ごとに身長が伸びていくような気持になっていたかもしれない。左肩をいからせて歩く癖は、故郷の南部富士（岩手山）の雄姿を真似ているうちにいつしか身についたと伝えられている。その癖は、小柄な体型をカバーするに十分な威風堂々のタクボク・ウォークとして完成の域にあったようだ。(好川之範『啄木の札幌放浪』参照、p.17) この男の名は石川啄木、背丈 5 尺 2 寸（158㎝）、体重 12 貫（45 キロ）の体格であった。

島崎藤村の『若菜集』(1897) にある「初恋」と題するあまりにも有名な詩の中の一連が、啄木の脳裏をよぎったかもしれない。ここには性愛の芽吹きのようなものは認められるが、それが「初恋」という言葉の殻を啐啄(そったく)して、表に出てきそうな緊張感はない。

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初(そ)めしはじめなり

秋晴れの美しい日で、林檎園の石柱の門を入ると、樹木の茂った中に石の長い小道があって広い玄関はひっそりとしていた。小鳥が爽やかな声で、囀っている。啄木の案内を求める声に応じて姿を現したのは、千恵子の兄の儀一であった。「生憎千恵子は留守であるが、まあ上がりなさい」と勧められて、啄木は庭に面した大きな座敷に通った。見るからに旧家の佇ま

いがうかがい知れた。欄間には、千恵子の父に宛てた同志社大学の創立者新島襄からの長い手紙が額にしてあった。（詳しくは、『新島襄全集 3』書簡編Ⅰ、1987、p.492）

千恵子の実兄（長男）の橘儀一の書いた「啄木と橘千恵子」（函館市中央図書館蔵：『紅莉闌』、昭 4.3.8）によれば、「啄木君が札幌に来た。そして間もなく去った。その中に一度拙宅を見舞われましたが、丁度妹不在の為、啄木君も本意なくも帰られました。」とある。啄木が札幌に滞在したのは、明治 40 年 9 月 14 日～ 27 日までの 2 週間であるから、その中の一日を選んで、千恵子を訪問したのであろう。あいにく千恵子は不在であり、彼女が帰宅したときに兄は、「今日石川と云う人が来ましたよ」と告げると、妹は「そう‼ そうですか。あの方は函館で一緒に仕事をして居た方で、新しい歌よみなんですよ」。そこで兄儀一は、初めて啄木を知ったのである。橘儀一の書いた文章は、「啄木と橘千恵子」後記（昭 5.3.20）と共に、行間から生身の千恵子が立ち上がってくるようで、興味深いものである。

苜蓿社の同人であった向井永太郎の招きで、札幌にきて啄木は嬉しかった。札幌は啄木が本当に気に入った最初の都市であった。「札幌は詩人の住むべき地なり」と啄木は書いている。「札幌は大なる田舎なり、木立の都なり、秋風の郷なり、しめやかなる恋の多くありそうなる都なり、路幅広く人少なく、木は茂りて蔭をなし人はみなゆるやかに歩めり。」と日記にある。（「全集」vol.5, p.191）しかし啄木が札幌に滞在したのは短い。『札幌北門新報』というわずか 6 頁建ての、発行部数 6 千部の新聞社で働いたが、記者ではなくて校正係として、午後 2 時～ 8 時まで働いた。向井に頼んだ偽の電報では、啄木は給与は 30 円としたが、実際には 15 円であった。翌日、啄木は日本基督教会に行った。説教は「放蕩息子」についてであった。説教の内容に、自分自身の零落意識を重ねていたのかもしれない。

札幌に / かの秋われの持てゆきし / しかして今も持てるかなしみ

「石をもて追わるるごとく」故郷の渋民村を出た啄木は、零落意識と流転生活の悲哀を背負って、二度と故郷に足を踏み入れることはなかった。「もてる悲しみ」は、愛する人々と別れて、函館より札幌に転住した漂白の悲しみである。二度しか話せなかった函館の橘千恵子への惜別の念も揺曳しているようでもある。次掲歌の「かなし」は、心が強くひかれる、素敵だという意味である。札幌の秋の異国的なさわやかさを歌っている。

アカシヤの街樾にポプラに / 秋の風 / 吹くがかなしと日記に残れり

しんしんとして幅広き街の / 秋の夜の / 玉蜀黍の焼くるにほひよ

小樽（歌わざる小樽人）明治 40 年 9 月 27 日、札幌より急遽『小樽日報』の創業にはせ参じた。小樽滞在 114 日。

啄木は札幌でできたばかりの友人の小国露堂が、『小樽日報』の話を持ちかけてきた。彼は、新装なったばかりの小樽日報社を訪れ、主筆の岩泉江東に会う。月俸 20 円。

小樽の人々は、経済的生活に狂奔していた。啄木は、「彼等は休息せず、また歌わず、また眺めず。ただ疾駆し、ただ驀進す。」（「胃弱通信」）と書いている。経済的発展の疾風怒濤期を過ぎた函館、経済的発展の時期がまだ到来していない牧歌的な札幌、今まさに経済発展の疾風怒濤の只中にある小樽、啄木の歌はこれらの 3 都市を生彩豊かに映している。

かなしきは小樽の町よ / 歌ふことなき人人の / 聲の荒さよ

小樽で知り合った、啄木より 4 歳年上の野口雨情（のちに「七つの子」「青い目の人形」「船頭小唄」「波浮の港」などで有名になる童謡詩人）と共に岩泉主筆排斥運動を展開する。これは若気の至りというべき無茶な企みであったが、これで野口が馘首され、啄木は記者として有能だということで残された。小樽新聞社の社長は白石義郎といって、若い頃に自由民権運動に挺身した政治家でもあった。啄木の在社中の記者・編集者としての働きは獅子奮迅であったが、主筆解雇が決まってから、強い反感を持った小林寅吉事務長は、ついに啄木に暴力を振うに至る。

敵として憎しみ友と / やや長く手をば握りき / わかれといふに

12 月 12 日、小林事務長に殴打され、社を飛び出して失職してしまった啄木は、そのまま貧窮生活に飛び込むことになった。翌年の 1 月 19 日、ようやく新しい就職口の釧路新聞社が決まって、単身小樽を発つ。小樽駅頭での詠が、上掲歌である。「わかれというに」に啄木の屈折した心理がうたわれている。別離の悲しみに一瞬憎悪の消滅した「わかれ」の情景を巧みにとらえている。撃つ者と撃たれし者、二人の男は、しっかり互いの目を見つめあったことであろう。

釧路（極寒の最果ての町）釧路滞在 75 日　明治 41 年 1 月 21 日、啄木は凍てついた釧路駅に降り立った。『釧路新聞』の記者となる。

さいはての駅に下(お)り立ち / 雪あかり / さびしき町にあゆみ入(い)りにき

蕪村の「月天心貧しき町を通りけり」を模倣して成り立っている、という説もあるが、この歌は、何ということのない生活体験的な言葉の間に〈雪あかり〉の一句を挿入することによって、一挙に詩へと昇華させられている。

啄木は、岩見沢の駅長官舎に住む姉夫婦の山本千三郎夫妻を訪問して一泊する。この町は、零下 41 度を記録したこともある極寒の町だ。啄木が釧路に滞在したのは、1 月 21 日から 4 月 5 日までのわずか 75 日間である。『釧路新聞』記者としての啄木の活躍は瞠目に値するものであった。卓越したフェミニズム論、政治評論、当時の雪の北海道を記した名文「雪中行」、そして当時の田舎新聞に不可欠の軟派記事の「紅筆(べにふで)便り」等々。啄木は硬軟両派の新聞記者を兼ねさらに編集長格をまかされていた。

しらしらと氷かがやき / 千鳥なく / 釧路の海の冬の月かな

この一首は、釧路時代への追想歌であるが、啄木の歌では比較的珍しい純然たる叙景歌であり、現在釧路市知人(しりと)海岸にある啄木の歌碑に刻まれている。

作家渡辺淳一の「あえて、わが啄木好み」(『石川啄木 新潮日本文学アルバム』、1984) によれば、「釧路の海に、正確の意味で千鳥はいない。」という。困ったことには、それが事実以上に、読む人にリアリティを与えて、酔わせてしまう、と書いている。啄木は巧みで不思議な、酩酊感のある作家である。このような詩人が、人々に愛されぬわけはないのだ。

小奴といひし女の / やはらかき / 耳朶(みみたぼ)など忘れがたかり

軟派記事取材も兼ねて出かけた粋筋は、単身赴任の啄木には居心地がよかったらしい。料亭のひとつに鶯寅(しゃもとら)というのがあり、小奴はそこの芸者で 17 歳、啄木より 5 歳年下であった。若き敏腕記者の啄木は、釧路で初めて芸者遊びを覚えた。しかもお相手は、釧路粋界の花形の位置を占めていた。啄木はたぶんその耳を噛んだのであろう。ふっくらと、やわらかい耳朶であった。性愛の一場面を切り取った、意表を衝いた表現で、形象化の上からも記憶に残る歌だ。「といひし女」と少し距離をおいたのも回想の歌として余裕がある。小奴は本名近江ジンといって、のちに東京に出てきて、啄木に小遣いをくれたり、友人の金田一京助にも会ったりもしている。晩年は短歌を作ることもあった。「ながらへて亡き啄木を語るとき我の若きも共になつかし」などと歌っている。『一握の砂』の「忘れがたき人人 一」の中に、小奴との交遊を詠んだ 12 首がまとめて編まれている。

その後、啄木は所用で、岩見沢、旭川、函館、小樽、函館をそれぞれ数日間訪問しているので、北海道滞在は合計で 356 日となる。

5 度目の上京（ふるさとの空遠みかも）

啄木は、北海道を離れ、横浜行の三河丸の 3 等室で上京した。4 月 24 日の日記には、「噫、所詮自分、石川啄木は、如何に此世に処すべきかを

知らぬのだ。犬コロの如く丸くなって三等室に寝た！」とある。上京後間もなく、啄木は森鴎外に宛てた書簡（41.5.7）で、この上京の目的について、「海氷る御国のはてまでも流れあるき候ふ末、いかにしても今一度、是非今一度、東京に出て自らの文学的運命を極度まで試験せねばと決心し、矢も楯もたまらず、（略）単身緑の都に入り候ふ」と書いている。この不退転の決意こそ啄木における最後の文学的興奮の絶頂期であり、啄木に許された最後の文学的生活であった。

〈東京病がおこり〉と研究者はいうが、啄木は「都市は人間を自由にする」という、所謂都市神話のもとで、自らを地方で埋もれる才能ではないとする強い自尊心が働いた。才能あるものの焦りか、青春の傲りか、いずれにせよ彼は実生活においても酩酊感の中に棲んだ。啄木独特の天才主義的な浪漫主義が、煉獄で焼き尽くされた時期の記録が『ローマ字日記』（明42.4.7 ～ 6.16）である。北海道漂白から上京し、8ヵ月奮闘してみたもののどうしても会心の小説が書けない啄木は自信喪失状態であった。1月、2月、3月と煩悶と焦燥は深まっていった。そして4月7日、ローマ字日記をつけ始めたその初日に、啄木のもとにタチバナ･チエコから葉書が届く。「病気がなおって先月26日に退院した」という文面であった。千恵子は死線をさまようような大病を患っていたのであった。そして4月24日の「日記」には、「札幌の橘千恵子さんから……『函館にてお目にかかりしは僅かの間に候いしがお忘れもなくお手紙……お嬉しく』―と書いてある。『この頃は外を散歩する位に相成り候』と書いてある。『昔偲ばれ候』と書いてある。そして『お暇あらば葉書なりとも―』と書いてある。」とある。この頃、次の歌が結晶する。（「創作」明43.5月号）

君に似(に)し姿を街(まち)に見る時の
こころ躍(をど)りを
あはれと思へ

流離の旅人としての追憶や故郷を離れた者の郷愁は、望郷の念となって光芒を放ち、東京という大都会生活に疲れた啄木を癒す。現実からの逃避という側面を持つだろうが、函館の想い出は、光を失わない幻影として（イリュージョンとなり）、千恵子の姿を追い求めていた。のちにこの歌を読んだ智恵子の、驚き、胸の高鳴る鼓動 、紅らむ面差しまで想像できてしまう。

いそがしき生活(くらし)のなかの / 時折(ときおり)の物(もの)おもひ / 誰(だれ)のためぞも

啄木の時折の物思いは智恵子への思慕であり、都塵に疲労困憊した自己への慰謝でもあった。啄木の天才の不思議は、朝日新聞社の多忙な仕事な

どで、大きなプレッシャーがかかったときこそ、歌がとめどもなく溢れ出すところにある。短歌(うた)の大爆発、乃至は〝ビック・バン〟といえよう。深く内面化して沈潜していた恋は美しい歌となって湧出してきたのであった。火山の爆発のような生命の異常燃焼は2日間で261首余の歌を一挙に作った。啄木日記（明41. 6.25）には、「頭がすっかり歌になってゐる。何を見ても何を聞いても皆歌だ。」と書いている。満ち溢れたものが奔流となって流れでたのだった。この新しい歌群には名歌秀歌が実に多い。

処女歌集『一握の砂』は、この時から以後の作品を網羅したものといわれる。原稿を東雲堂にいれたのは、10月下旬であったが、7割を占めるのが盛岡の中学時代と北海道漂白の追想歌および故郷渋民村をめぐる望郷歌であった。歌集は明治43年12月1日に発刊され、札幌の千恵子にも一冊が送られた。返事を待ちきれなくなった啄木は葉書を出す。葉書は抑制のきいた美しい文章であるが、文字は乱れている。

> 心ならぬご無沙汰のうちにこの年も暮れむといたし候、雪なくてさびしき都の冬は夢北に飛ぶ夜頃(よごろ)多く候、数日前歌の集一部お送りいたせし筈に候いしが御落手下され候や否や、そのうちの或(あ)るところに収めし二十幾首、君もそれとは心付給いつらむ、塵埃(じんあい)の中にさすらう者のはかなき心なぐさみをあわれとおぼし下され度く、おん身にはその後いかゞお過ごし遊ばされ候いしぞ
>
> あと七日にて大晦日という日の夜

「忘れがたき人人 二」の短歌群に、啄木の「哀切極まりなき片恋」（吉田孤羊）、「架空の恋」（今井泰子）、「永遠の恋」（好川之範）などを読み取る研究家がいるが、筆者は100％片恋であるとは考えていない。智恵子は、この葉書をどうしても保存しておきたくて、葉書のある個所（文中のアミ掛けの部分）に厚紙を貼り、『一握の砂』の裏表紙の見返しに葉書表を貼付して秘蔵した。啄木へ送った智恵子の礼状には、「お嫁には来ましたけれど心はもとのまんまの智恵子ですから」と書かれていた。彼女の隠された心情を読みとれば、啄木への清純な思慕があったように思われてならない。彼女は産褥熱のため、34歳の若さで他界したが、詩集『あこがれ』と歌集『一握の砂』の2冊が生家に残されていた。

おわりに

明治42年1月10日の啄木日記が示すように、〈情誼の束縛！〉につい

て書いている。彼にとって最も情誼に厚い人は三人ある、と書いている。つまりその三人は、宮崎郁雨（大四郎）、与謝野氏夫妻（鉄幹・晶子）、金田一京助であるという。鉄幹は16歳の石川一（はじめ）を発見して、彼の歌一首を機関誌『明星』に載せた。雅号を白蘋（はくひん）から啄木（たくぼく）としたのは鉄幹の薦めである。晶子は「森鴎外先生と啄木さんの額の広く秀麗であることが其人の明敏を象徴している」と賛めた。豊麗な額、莞爾として光る優しい眼、少し気負って揚げた左の肩、笑うと八重歯がのぞく、全体に颯爽とした風采の少年であった。啄木の妹の光子は、揶揄気分で、兄のおでこが突出ているので、「雨がふっても傘いらず転んでも鼻うたず」と悪態をついたことを後年述懐している。

あの頃はよく嘘を言ひき。/ 平気にてよく嘘を言ひき。/ 汗が出づるかな。

山下多恵子『啄木と郁雨―友の恋歌 矢ぐるまの花―』（『新潟日報』56回連載）の中で紹介されているが、啄木の上掲歌を引用すると共に、次のように書いている。

> 後年二人は、想像力が豊かで、弾みがつくと際限なく大仰になっていく啄木の話しぶりを表現して、鉄幹は「啄木君のロマンチック時代の夢の華」と言い、晶子は「石川さんの嘘を聞いていると桜吹雪に吹かれているようだ」と言った。（p.90）

啄木の北海道の一年間は、職を追って流転する痛切な日々の連続であったが、しかし、ここには青春であるがゆえの情熱が燃えていた。野心満々であり恋愛もあったようだ。これらの一切をひっくるめて、実生活とつながるあたらしい抒情精神を育てた。室生犀星の『抒情小曲集』や北原白秋の『思い出』とともに近代抒情詩の優れた成果をなしている。

詩人北原白秋は、啄木へのオマージュとして下記のように言及している。

> 石川啄木氏が死なれた。私はわけもなく只（ただ）氏を痛惜する。ただ、黙って考えよう。赤い一杯の酒が、薄汚い死の手につかまれて、ただ一息に飲み干されて了（しま）ったのだ。氏もまた百年を刹那にちぢめた才人の一人であった。（「別冊太陽」195「石川啄木　漂白の詩人」2012、p.152）

北の大地の鹿の子百合　[註]

『一握の砂』（*A Handful of Sand*）の「忘れがたき人人 二」22首と『悲しき

玩具』（*Sad Toys*）１首に関しては、複数の英訳がある。

①

いつなりけむ
夢にふと聴(き)きてうれしかりし
その声もあはれ長く聴(き)かざり

WHEN WAS IT NOW?
I felt the joy of her voice
Flash in a dream
Her voice long gone from me
now. ―（RP）

②

頬(ほ)の寒き
流離(りうり)の旅の人として
路問(みちと)ふほどのこと言ひしのみ

A man with cold cheeks,
On a journey in an uncertain
place ―
All he asked was which road to
take. ―（DK）

③

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴(き)きつらむ
それだけのこと

I talked
casually
you listened
the same ―
that was all ―（CS）

④

ひややかに清(きよ)き大理石(なめいし)に
春の日の静かに照るは
かかる思ひならむ

I wonder if such love
Is like spring light shining softly
On cool, pure marble. ―（DK）

The memory of my love ―
Soft spring sunshine
On cool clean marble
―（SG & SS）

⑤

世の中の明るさのみを吸(す)ふごとき
黒き瞳(ひとみ)の
今も目にあり

they seem to drain all the light
from this world
even now I see
your dark-lit eyes ―（CS）

DARK PUPILS
Your dark pupils
  That seem to absorb
Only the brightness of this world,
  Are still before my eyes.
— (SS)

HER EYES
I can still see those black eyes
As if they had absorbed
All the brightness under the sun.
— (RP)

Her black pupils
Absorbing only the light of this
    world
Remain in my eyes — (SG & SS)

⑥
かの時に言ひそびれたる
大切(たいせつ)の言葉は今も
胸にのこれど

Even now the vital words
I failed to say at the time
Linger in my breast. — (DK)

⑦
真白(ましろ)なるラムプの笠(かさ)の
瑕(きず)のごと
流離(りうり)の記憶消(け)しがたきかな

Like to a flaw
  On the white shade of a lamp,
'Tis hard to blot out
  The memory of my wanderings
— (SS)

⑧
函館(はこだて)のかの焼跡(やけあと)を去りし夜(よ)の
こころ残りを
今も残しつ

The ruins of Hakodate City I left
on the night soon after its great
    fire,
yet I still have some regrets.

⑨

人がいふ
鬢(びん)のほつれのめでたさを
物書(ものか)く時の君に見たりし

As it's often called
'auspicious fortune' to see a
woman's hair tangled
behind her ears—I saw it on her
head when she was writing.
— (TS)

⑩

馬鈴薯(ばれいしょ)の花さく頃と
なれにけり
君もこの花を好きたまふらむ

potato flowers
are out
bet
you like
them too — (CS)

⑪

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君(きみ)を思へり

As boys born in mountains
Yearn for mountains,
I think of you when in sorrow.
— (SG & SS)

As A SON of the hills
Thinks of the hills,
When in sorrow
I always think of you. — (SS)

As a child born among the
mountains
Longs for the mountains, so do I
Yearn always after you, my
dearest,
Left weary and forlorn to sigh.
— (HH)

⑫

忘れをれば	Though I can forget my dearie
ひよっとした事が思ひでの種(たね)にまたなる	for a short while,
忘れかねつも	some trifle occurs. causing me to recall her,
	and I cannot forget her. —(TS)

⑬

病(や)むと聞き	Getting a report
癒(い)えしと聞きて	of her illness and again
四百里(しひゃくり)のこなたに我(われ)はうつつなかりし	of her recovery,
	I was ill at ease, indeed, living
	four hundred *ri* off. —(TS)

⑭

君に似(に)し姿を街(まち)に見る時の	see someone
こころ躍(をど)りを	like you go by
あはれと思へ	my heart
	starts jumping・・・
	sad, isn't it —(CS)

Pity my heart
That leaps up
When, in the street,
I catch a sight that recalls you.
—(SS)

Oh, do take pity on me, pray,
And think how fast my poor heart beats
When any one who looks like you
I chance to come on in the streets. —(HH)

⑮

かの声を最一度聴かば
すっきりと
胸や霽れむと今朝も思へる

I thought this morning —
If I could hear
Your voice once more,
I might be light-hearted again.
— (SS)

⑯

いそがしき生活のなかの
時折のこの物おもひ
誰のためぞも

Every now and then I happen to think of things
in spite of my life busy beyond comparison;
O, for whom is it, I wonder?
— (TS)

⑰

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

May there be some friend
with whom I can talk anything in real earnest
that I may open my mind and tell something about her. —(TS)

⑱

死ぬまでに一度会はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

Were I to confess
I wished to see you before I died,
Would you give me the slightest nod? — (SG & SS)

If I should write, —
"Once more before I die,
Let us meet," —
Then you, too,
Might faintly assent. — (SS)

⑲

時として
君を思へば
安(やす)かりし心にはかに騒ぐかなしさ

Sometimes
When I think of you,
Alas! my peaceful soul
Suddenly becomes agitated.
— (SS)

⑳

わかれ来(き)て年を重(かさ)ねて
年ごとに恋(こひ)しくなれる
君にしあるかな

O the years have increased
Since we parted,
Yet the dearer you are with each spring. — (SG & SS)

㉑

石狩(いしかり)の都(みやこ)の外(そと)の
君が家(いへ)
林檎(りんご)の花の散りてやあらむ

Around your house
In the suburb of a town of Ishikari,
Apple blossoms now
May be afalling. — (SS)

In the suburbs of Ishikari City,
Your house stands,
Outside of which apple blossoms may have fallen.

㉒

長き文(ふみ)
三年(みとせ)のうちに三度(みたびき)来ぬ
我(われ)の書きしは四度(よたび)にかあらむ

A long long letter
Came to me three times during three years,
While I wrote a letter to her four times or so.

Three times
In three years
Long letters came.
Was it four times I had written?
— (SS)

㉓

石狩の空知郡(そらちごほり)の
牧場(ぼくじょう)のお嫁さんより送り来(き)し
バタかな

This butter
From a farm bride
In the distant north! —(SG & SS)

O, this fresh butter that has been
sent by the bride
at the green meadow of Sorachi
County
of Ishikari Region! — (TS)

◎啄木が橘智恵子に寄せた「相聞歌」23 首の英訳に関する参考文献

Donald Keene の評伝『石川啄木』新潮社（2016）と *The First Modern Japanese: The Life of Ishikawa Takuboku,*Columbia Univ. Press, 2016 ―（DK）
Carl Sesar の翻訳、*Takuboku: Poems to Eat* 講談社インターナショナル（1966, 廉価版は、One Shot Press, 2012）―（CS）
ロジャー・パルバース（Roger Pulvers）『英語で読む啄木　自己の幻想』河出書房新社（2015）―（RP）
Sanford Goldstein and Seishi Shinoda: *Romaji Diary and Sad Toys*; Charles E. Tuttle Company（1985）―（SG & SS）
須賀照雄『石川啄木短歌集』（*Complete English Translation*）中教出版 KK（1995）―（TS）
坂西志保『一握の砂』：*A Handful of Sand* by Shiho Sakanishi, Marshall Jones Company, Boston, 1934、『詩集一握の砂』（*A Handful of Sand*）讀書展望社、1947―（SS）
本田平八郎『石川啄木の詩』：*The Poetry of Ishikawa Takuboku,* by Heihachiro Honda, Hokuseido Press, 1959 ―（HH）
高峰博「悲しき玩具」*A Sad Toy,* by Hiroshi Takamine, Tokyo News Service, 1962
（＊短歌英訳中、―（　　）の付してないものは拙訳）

主たる参考文献

『石川啄木全集』（第 1 ～ 8 巻）筑摩書房、1978
石川啄木『一握の砂』近藤典彦編 朝日文庫、2008
石川啄木『一握の砂・時代閉塞の現状』宝島社、2008
石川啄木『一握の砂・呼子と笛』（日本の文学 20）ほるぷ出版、1985
石川啄木『悲しき玩具・彼等の一団と彼』（日本の文学 21）ほるぷ出版、1985
国際啄木学会『石川啄木事典』おうふう、2001
『石川啄木』新潮日本文学アルバム、新潮社、1984
『石川啄木詩歌集』伊藤信吉編（世界の詩 4）彌生書房、1963
ドナルド・キーン『石川啄木』（第 1~16 章）雑誌『新潮』2014.6~2015.10、新潮社
ドナルド・キーン『石川啄木』新潮社、2016
The First Modern Japanese: The Life of Ishikawa Takuboku, Columbia Univ. Press, 2016
上田博『石川啄木歌集全歌鑑賞』おうふう、2001
岩城之徳監修 遊座昭吾・近藤典彦編『石川啄木入門』思文閣出版、1992
岩城之徳編『石川啄木必携』學燈社、1967
岩城之徳『石をもて追はるるごとく 啄木名歌鑑賞』第二書房、1956
岩城之徳『啄木歌集全歌評釈』筑摩書房、1993
岩城之徳『石川啄木伝』筑摩書房、1993
近藤典彦『啄木短歌に時代を読む』吉川弘文館、2000
近藤典彦『啄木 六の予言』ネスコ / 文藝春秋、1995
近藤典彦『石川啄木 国家を撃つ者』同時代社、1989
近藤典彦編『復元 啄木新歌集』桜出版、2012
池田功『啄木日記を読む』新日本出版社、2011
池田功『新しき明日の考察』新日本出版社、2012
池田功『石川啄木入門』桜出版、2014
池田功『啄木の手紙を読む』新日本出版社、2016
池田功「石川啄木～愛に支えられた生涯～」（文の京 お散歩ブック）2015

山下多恵子『忘れな草 啄木の女性たち』未知谷、2006
山下多恵子『啄木と郁雨―友の恋歌 矢ぐるまの花―』未知谷、2010
今井泰子『石川啄木論』（日本の近代作家）塙書房、1974
森 義真『啄木 ふるさと人（びと）との交わり』盛岡出版コミュニティー、2014
三枝昂之『啄木 ふるさとの空遠みかも』木阿弥書店、2009
三枝昂之『昭和短歌の精神史』木阿弥書店、2005
長浜功『啄木を支えた北の大地』社会評論社、2012
高松鉄嗣郎『啄木の父一禎と野辺地町』青森県文芸協会出版部、2006
三浦光子『兄啄木の思い出』理論社、1973
平岡敏夫『石川啄木の手紙』大修館書店、1996
齋藤三郎『啄木文学散歩―啄木遺跡を探る』角川新書 56、角川書店、1956
宮本吉次『啄木の歌とモデル』蒼樹社、1953
宮本吉次『啄木の歌とモデルの人々』妙義出版刊、1956
小坂井澄『兄啄木に背きて―光子流転』集英社、1986
澤地久枝『石川節子―愛の永遠を信じたく候』講談社、1981
渡邊喜恵子『啄木の妻』（上中下巻）毎日新聞社、1980
杉森久英『啄木の悲しき生涯』河出書房、1965
堀合了輔『啄木の妻　節子』洋々社、1964
福地順一『石川啄木と北海道―その人生・文学・時代―』鳥影社、2013
川並秀雄『啄木新研究』冬樹社、1972
川並秀雄『啄木秘話』冬樹社、1979
吉田弧羊『啄木発見』洋々社刊、1969
吉田弧羊『啄木を繞る人々』日本図書センター、1990（復刻版）
松田十刻『26 年 2 か月 啄木の生涯』もりおか文庫、2010
好川之範『啄木の札幌放浪』クマゲラ BOOKS、1986
宮崎郁雨『函館の砂―啄木の歌と私と―』洋々社、1979